

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2013年の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、武田あさゑ、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		http://wasakiunichi.net/				
和歌ページトップ		http://wasakiunichi.net/waka/				
詠年		通釈		語釈		
年月日		題		他歌人欄		
主催: 岩崎純一	歌数:300首 歌人数:3名 自歌数:100首	『都道府県歌枕百首』(とどうふけんうたまくらひやくしゆ)				
2013/1/1 出題 2013/1/31 判	現在の都道府県の名所の景、及び都道府県の名所に寄せた恋の和歌を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 衆議判				評	派生歌など
2013/1/24	秋津島	秋津島名にや達(たが)ひて見れど飽かずひとせ巡る春風ぞ吹く	日本は、「飽きてしまった(飽きつ)」の名を持ちながら、名とは違って見飽きない光景であって、秋風のみならず、一年を巡り巡るような心地よい春風も吹いているのだ。	◇掛詞「秋津×飽きつ」 ◇対句「秋/春」		
2013/1/24	大八洲	大八洲(おほやしま)八重(やへ)に始めし十重二十重(とへはたへ)あまた鳥根にしきる波風	日本の原初の頃に大八洲と呼ばれた本州・四国・九州・佐渡・淡路・隠岐・対馬・舌岐に限らず、今や北海道から南西諸島まで多くの島々が日本と呼ばれて、何重にも波が寄せ風が吹くことだ。	◇序詞「(大)八(洲)→八(重)」 ◇参照『記紀』 「深き御うつくしみ大八洲にあまねく」(『源氏物語 明』) ◇参照「いと早も鳴きぬる雁か白露の色どる木々ももみぢあへなく」(『古今』)		
2013/1/25	敷島	いと早(はや)も折節(をりふし)うつる敷島(やもみぢ)に花の散る心地して	何とも早く季節の移り変わる日本よ。秋の紅葉の葉の上に春の桜の花が同時に散っている気がする。	◇「雪もよに」は、「雪も夜に」「雪もよひ」など諸説あり。 「心さへ空に乱れしゆきもよにひとり冴さえつる片敷きの袖」(『源氏物語 真木柱』) 「草木もふりまがへたる雪もよにに春待つ梅の花の香ぞする」(『新古今』) ◇参照「白妙の鶴の毛衣めでたう」(『栄花物語』)		
2013/1/25	豊葦原	白妙の豊葦原の雪もよに光を添ふる鶴の毛衣	葦が生い茂り真っ白な雪が降る中、いっそう白き光を添える真っ白な羽毛の鶴が羽ばたく、日本よ。	◇「弘仁私記」:「日の本」 ◇掛詞「忍び×偲び」 ◇語「稲葉の雲」 ◇縁語「瑞穂、稲葉」 ◇掛詞「(月影の)満つ×瑞(穂)」 ◇参照「民やすき田の面のいほの秋風に稲葉の雲は月もさはらず」(藤原資宣『緑拾遺』)		
2013/1/25	日の本の国	日の本の国の名負へるかごとかはしのび眺めむ有明の月	「日の本の国」と我が国が名付けられたのは、その陰で我々が密かに有明の美しい月を慕い眺めるためだったのだろうか。	◇掛詞「忍び×偲び」 ◇語「稲葉の雲」 ◇縁語「瑞穂、稲葉」 ◇掛詞「(月影の)満つ×瑞(穂)」 ◇参照「民やすき田の面のいほの秋風に稲葉の雲は月もさはらず」(藤原資宣『緑拾遺』)		
2013/1/25	瑞穂の国	月影の瑞穂の国のさやけさに稲葉の雲を過ぐる秋風	この日本の、澄んだ月影の照り映える、雲のようなみずみずしい稲穂の上を、秋風が吹き過ぎてゆく。	◇掛詞「(月影の)満つ×瑞(穂)」 ◇参照「民やすき田の面のいほの秋風に稲葉の雲は月もさはらず」(藤原資宣『緑拾遺』)		
2013/1/1	北海道 景 蝦夷	いにしへは大和(やまと)のうちとえぞ言はで心も凍る寂しさの果て	大昔、蝦夷は日本のうちにあつたとは言えないが、それはまた、心も凍るような寂しさの果ての北国である。	◇掛詞「えぞ(言はで)×蝦夷」		
2013/1/1	北海道 恋 千島	北風は一夜(ひとよ)も逢はぬかごとかは千島の氷床(ひやど)にうつつして	寒い北風は、恋人同士が逢わない口実になるでしょうか。千島列島を囲む氷の世界は、今や涙の凍った私の床にあります。	◇対句「一夜//千島」		
2013/1/1	青森県 景 津軽	心まで震れし風よ面影の音に暮れてゆく津軽かな	心にて妻が降り風が吹く気がする。輝かしかつた昔の面影と共に、津軽の夕日も暮れてゆく。	◇掛詞「面影×重(き)影」 ◇対句「重//津軽」 ◇掛詞「(波)満ち×陸(奥)」 ◇音「うち(うち)にも、打ち寄する」 ◇対句「外×内」 ◇参照「みちのくの外が浜なる呼び鳥鳴くなる声はうとうやすかた」(定家) ◇掛詞「斯かる(このよ)×(散る紅葉が月光に)掛かる」 ◇参照「聞きませず東稲山の桜花吉野の外にかかるべしとは」(西行)		
2013/1/1	青森県 恋 外が浜	外が浜胸の内に打ち寄する波みちのくの袖の呼子(よぶこ)や	胸のうちにまで打ち寄せてくるような悲しい波が、青森外が浜に打ち寄せ、浜を満たしている。来ない恋人を呼ぶだけの、呼び鳥のような浜の待ち人が、袖を涙で濡らしているのであった。	◇掛詞「(波)満ち×陸(奥)」 ◇音「うち(うち)にも、打ち寄する」 ◇対句「外×内」 ◇参照「みちのくの外が浜なる呼び鳥鳴くなる声はうとうやすかた」(定家) ◇掛詞「斯かる(このよ)×(散る紅葉が月光に)掛かる」 ◇参照「聞きませず東稲山の桜花吉野の外にかかるべしとは」(西行)		
2013/1/3	岩手県 景 東稲山	世に聞きし東稲山(たばしねやま)に秋更けて紅葉もかかる夜半の月影	「吉野の桜ほどに美しい」と世に歌われた東稲山に、これまた美しい秋の季節が深まり、このようにすばらしい紅葉が、夜の月影を横切り散る。	◇掛詞「(恋を)言はで×岩手」		
2013/1/3	岩手県 恋 北上川	わが涙恋は岩手ぞ流るや北上川の緩きものは	恋心を伝えなくて流れる私の涙が、岩手は北上川の緩い勾配のようなことがあるでしょうか。	◇対句「春と秋との淵と瀬は」 ◇参照「みそぎて神の恵もも広瀬川幾千世までかすまんとすらん」(隆信『千五百番歌合』)		
2013/1/3	宮城県 景 広瀬川	広瀬川春と秋との淵と瀬は幾千世(いくちよ)飽かぬ堰(せき)の景色か	曲がりくねった広瀬川の四季折々の淵や瀬の景色よ。桜の花や紅葉の葉が溜まった堰の光景は、いつ見飽きるのか。	◇掛詞「雪がかかる×行きかかる」 ◇参照「(不安感が×雪が)足手まとひ」 ◇参照「みちのくの緒絶の橋や是ならんふみみみまらずみ心まどはず」(道雅『後拾遺』) ◇参照「松島は笑ふが如く、象潟は憶むが如し」 「象潟や雨に西施がなぶの花」(『奥の細道』)	◆白玉姫の悲恋伝説に取材。(自注)	
2013/1/3	宮城県 恋 緒絶橋	雪かかる緒絶(をだえ)の橋をふみ惑ふ白玉知り足手まとひに	雪の降りかかる緒絶の橋を今にも踏み渡ってゆき、恋文を出そうとしましたが、やめました。昔ここで身を投げた白玉姫の話を知ってしまった私が、今度は同じことになるかもしれないという、雪のまわりつような足手まとひに。	◇参照「消えし世の跡とふ松の末かけて名のみ千歳の秋の月影」	◆名取左衛門太郎と阿古耶姫との悲恋物語に取材した歌。(自注)	
2013/1/2	秋田県 景 象潟	象潟(きさかた)の笑はぬつらき西の湖(うみ)に慍(うら)むが如く降る時雨	笑いもしない、悩ましい様子の、西海岸の象潟の湖に、何かを憶む様子が降る時雨よ。			
2013/1/2	秋田県 恋 男鹿半島	男鹿(をが)の瀉波理(うつ)もる世の袖も昔の恋に沈む月影	男鹿半島が干拓され近代的な八郎潟となった今の世も、私の袖は涙に濡れ、湖の代わりに月影をしっかりと沈め映している。			
2013/1/2	山形県 景 最上川	峽(かひ)抜けてもみち早瀬の最上川夕日連れ添ふ秋の流れよ	峡谷を抜け、散った紅葉を乗せて流れる、急流の最上川。夕日も連れ添う秋らしい流れであるよ。			
2013/1/2	山形県 恋 阿古耶松	涙川阿古耶(あこや)の松に姫伏して流れぬものは夢の架け橋	昔の恋人が成り果てた阿古耶の松に、阿古耶姫は泣き伏せ、涙が名取川に流れ落ちた。流れぬものは、恋人の松でできた、今や夢の中の架け橋だけであった。			
2013/1/4	福島県 景 白河の関	夏越えし峠の光昔にて空も吹雪の白河の関	夏に越えた峠の道の日光はもう昔のことで、今や空じゅう吹雪の舞う白河の関である。			
2013/1/4	福島県 恋 阿武隈川	霧くもる阿武隈川に影落つるすべなきあとの有明の月	霧で曇っている阿武隈川の水面に、恋人が戻ってこない象徴の有明の月の影が落ちていく。	◇本歌取「阿武隈に霧立ちくもり 明けぬとも君をばやらし待てばすべなし」(『古今』)		

2013/1/5	茨城県 景 霞ヶ浦	立ちのぼる霞が浦の朝日影渡し船こぐ青柳(あそやぎ)の風	立ちのぼる霞ヶ浦の霞の奥、朝日影よ。渡し船をこぐかのように風が吹き、青柳を揺らしている。		
2013/1/5	茨城県 恋 恋瀬川	恋瀬川袖のしづくを名乗るらむ水上(みなかみ)今も涙流れに	恋瀬川がこのような名であるのは、かつて「志築川(しづくがわ)」と呼ばれた通り、今も川の流れるように流れ続ける失恋の涙の滴を名乗っているからでしょう。	◇参照 「恋瀬川浮名を流す水上も袖にたまらぬ涙なりけり」(大江政国女『続後拾遺』) 「水の上の泡と消えなば恋瀬川流れてもは思はざらまし」(『新拾遺』) 「志築川」:『常陸国風土記』	
2013/1/5	栃木県 景 遊行柳	柳陰しばしの心朽ち果てず芦野の里に夏の風吹く	芦野の里に来てみると、穏やかな夏の風が薫る中、柳の陰で少しだけ休もうとして結局長居した西行の心だけが、人間の体のように朽ち果てぬものだと、私の心にも解されるのであった。	◇本歌取 「道のべに清水流るる柳かげしばしとてこそ立ちどまりつれ」(西行『山家集』) ◇謡曲『遊行柳』:観世信光	
2013/1/5	栃木県 恋 室八島	わが恋を室の八島の煙とてまがへぬ空にあそぶ糸遊(いとゆふ)	ごまかしきれないほど強い私の恋心を、室の八島の煙のように弄ぶ陽炎。あなたは、その陽炎のような人です。	◇参照 「いかにせん室の八島に宿もがな恋の煙を空にまがへん」(俊成『千載』) ◇参照 「糸遊に結びつきたる煙哉」(『曾良旅日』)	
2013/1/4	群馬県 景 伊香保	立ちのぼる伊香保の煙霞心春様名(はるな)の月の朧夜の空	伊香保温泉の煙と霞とが入り混じって立ちのぼる春の、様名湖の空に照る朧月の夜景よ。	◇序詞・音 「～春(はる)→様(はる)名」	
2013/1/4	群馬県 恋 佐野船橋	あひ割かれ佐野の船橋とだえして炎二つに飛ぶ螢かな	お互いに通い合う佐野の船橋を村人たちに壊され、誤って両側から川に落ちて亡くなった二人を思わせる二匹の螢が、炎のようにまぶしく飛んでいる。	◇参照 「上毛野佐野の船橋取り放し親はさくれど妻はさかるがへ」(『万葉』) ◇掛詞 「(細道)に入る×入(間)」 ◇「人間の郡三芳野の里」(『伊勢物語』) ◇「帰りはこはき→帰りはこわい」(童歌『通りやんせ』)	◆佐野の船橋付近に伝わる、小治朗とナミの悲恋物語を掛ける。(自注)
2013/1/6	埼玉県 景 三芳野	細道に人間(いるま)の巫女の神降ろし帰りはこはき三芳野の里	人間郡にある細道に入るや否や、巫女の神降ろしの様子が目に飛び込んできた。行きはよいよい、帰りはこわい、三芳野の里の地よ。	◇掛詞 「堀兼×掘り難ね」「井×(泣きて)居」 ◇参照 「いかでかは思ふ心は堀かねの井よりも猶ぞ深さまされる」(伊勢『伊勢集』)	
2013/1/6	埼玉県 恋 堀兼の井	堀兼(ほりかね)や掘れば心の深さにて泣きて井に似る水も湧かな	「掘り難(か)ねる」の名を持つ堀兼の井戸も、いざ掘るとなると、恋心ほど深く掘ってしまえば、涙ほど多くの水も湧いてきたことです。		
2013/1/7	千葉県 景 野島崎	船霊(ふなだま)の光を立つる野島崎沖をあまたの漁り火の空	船の守護神たらんと見える野島崎灯台の光が雄々しく輝き立ち、沖には多くの漁船の火が空にまで輝き満ちている。		
2013/1/7	千葉県 恋 真間	葛飾や夏虫の火の恋絶えぬ真間の手児奈(てこな)の涙降る夜に	葛飾の真間の地で、火に入る夏の虫のように、全ての男たちの恋が消えた。入り江に入水しながら涙する美女の命が、消えたその時に。	◇「真間の手児奈」(『万葉』頻出) ◇参照 「咲(え)みて立てれば夏蟲の火に入るが如し」(高橋虫麻呂『万葉』)	
2013/1/6	東京都 景 武蔵野	月出づる旅路果てなき武蔵野の萩原さやく秋枯れの声	月の出た武蔵野の果てしない旅路に、秋枯れの萩原のそよぐ音が聞こえてくる情景。	◇参照 「行く末は空もひとつの武蔵野に草の原よりいづづる月影」(丸峯良経『古今』)	
2013/1/6	東京都 恋 隅田川	夕暮の隅田川原(すみだがはら)の都鳥昔を負へる空ぞ答へぬ	夕暮の隅田川の川原に都鳥がいる風景よ。かつて在原業平が「ありやなしや」と問うたこの鳥が飛んでゆく空も、答えぬ様子で茫漠と広がっているのみであった。	◇本歌取 「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(『伊勢物語』) 「我が思ふ人に見せばやもろとも隅田川原の夕暮の空」(俊成『新勅撰』)	
2013/1/7	神奈川県 景 走水	走水(はしりみづ)海原(うなばら)猛(たけ)き船渡り橋薫る舵の面影	走水の港から、荒々しい海原を渡る船が勇ましく出てゆく。弟橘媛の面影を思わせる橋の花が舵に薫る、夏の頃。	◇掛詞 「(海原)猛(き)×(ヤマト)タケ(ルノミコト)」 ◇「弟橘比売命」:『古事記』 ◇走水神社	
2013/1/7	神奈川県 恋 二俣川	流れても二俣川の別れかな流れぬぬだに人ぞつれなき	私の涙の流れていない今のうちでさえ、あなたはつれない。このまま生き長らえて、つれなきのために私の涙が流れたら、それはそれで、二俣川のように、私たちに別れがやっ	◇掛詞 「流れても(川)が流れても×涙が流れても×生き長らえても)」 ◇語・字 「妙」と「高」は現在の表記「妙高山」より、「名」と「香」は旧当て字「名香山」より。 ◇枕詞 「白妙の一雪」 ◇掛詞 「(幾度も飽かず)越し×越の中山」	
2013/1/8	新潟県 景 越の中山	白妙の名高き雪の香り立つ幾度も飽かず越(こし)の中山	真っ白な雪の香りに満ち満ちた、何度山越しても飽きない、名高き妙高山の勇姿よ。	◇参照 「逢ふことをまたいつかはと木綿たすきかけしちかひを神にまかせて」(為兼) ◇参照 「あゆの風いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隔る見ゆ」(大伴家持『万葉』) ◇本歌取 「婦負の野のすきおしなべ降る雪に宿憎る今日し悲しく思ほゆ」(高市黒人『万葉』) ◇本歌取 「志雄路から直越え来れば羽咋の海朝風したり船櫃もがも」(大伴家持『万葉』) 「朝風に水手(かこ)の声呼び夕風に楫の音(と)しつつ波の上(へ)をい行きさくくみ」(丹比真人笠麻呂) ◇参照 「思ひやる越の白山知らねどもひと夜も夢に越えぬ夜ぞなき」(紀貫之『古今』) 「君がゆく越の白山知らねども雪のまにまにあとはたつねむ」(藤原兼輔『古今』) ◇本歌取 「春はただ朧月夜と見るべきに雪にくまなき越の白山」(良経『秋篠月清集』)	
2013/1/8	新潟県 恋 寺泊	流るるは咎(とが)ある人に同じかな寺泊まる浦の袖の白波	流れるのは、流罪となったあなたの身も、あなたを送るために寺泊にいる私の、越路(こし)の浦の白波のような袖の涙も、同じなのです。		
2013/1/10	富山県 景 奈呉の浦	奈呉の浦小舟あまたの漕ぎ隠る人の命も同じ露に	奈呉の浦の霞の奥に、漕ぎゆく多くの小さな釣り舟が、東風に吹かれて隠れてゆく。人の命もこのように消えてゆくのだ。	◇参照 「あゆの風いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小舟漕ぎ隔る見ゆ」(大伴家持『万葉』)	
2013/1/10	富山県 恋 婦負野	おしなべて婦負(めひ)の野の夜の枯れすすき人待つ宿の雪ぞ悲しき	夜の婦負の野の一面に枯れすすきが広がっている。人を待つ宿に降る雪が、いつそう悲しい。	◇本歌取 「志雄路から直越え来れば羽咋の海朝風したり船櫃もがも」(大伴家持『万葉』) 「朝風に水手(かこ)の声呼び夕風に楫の音(と)しつつ波の上(へ)をい行きさくくみ」(丹比真人笠麻呂) ◇参照 「思ひやる越の白山知らねどもひと夜も夢に越えぬ夜ぞなき」(紀貫之『古今』) 「君がゆく越の白山知らねども雪のまにまにあとはたつねむ」(藤原兼輔『古今』) ◇本歌取 「春はただ朧月夜と見るべきに雪にくまなき越の白山」(良経『秋篠月清集』)	
2013/1/10	石川県 景 羽咋	水手(かこ)見えぬ羽咋(はくひ)の海の夕風にさざ波の上(へ)は夢の楫の音(と)	船乗りの姿も見えない寂しい邑知潟(おうちがた)の夕風よ。さざ波の上には、夢まぼろしの楫の音が聞こえる。	◇参照 「思ひやる越の白山知らねどもひと夜も夢に越えぬ夜ぞなき」(紀貫之『古今』) 「君がゆく越の白山知らねども雪のまにまにあとはたつねむ」(藤原兼輔『古今』) ◇本歌取 「春はただ朧月夜と見るべきに雪にくまなき越の白山」(良経『秋篠月清集』)	
2013/1/10	石川県 恋 越の白山	秋暮れてくまなき影は春待たず月照る雪の越(こし)の白山	「春は、朧月夜のみならず、雪の白さが際立った越の白山も良い」と歌われたのはもちろん、雪の降り溜まった春を待たずして、暮秋の際立った月の光に照らされた、降り始めの頃の雪の越の白山も、大変にすばらしい。		
2013/1/11	福井県 景 三方の海	方々(かたがた)の三方(みかた)の海に影映る若狭の空の夕暮の月	三方五湖の四方八方の水面に影が映っている、若狭の地の空の夕暮の月よ。	◇掛詞 「三方(三方の海×色々な方角・四方)」 ◇序詞 「方々の→三方」	
2013/1/11	福井県 恋 恋の松原	いにしへの恋の松原枯れ果てて通はぬ坂に大雪ぞ降る	かつては松原のあったこの恋の松原の地も、松は枯れ果ててもう無く、二度と二人が通い合うことなくなった浦見坂には、今も大雪が降っている。	◇「坂」:恋の松原付近の浦見坂	
2013/1/9	山梨県 景 甲斐ヶ嶺	小夜更けて甲斐が嶺(ね)暗き神奈備(かむなび)やふぶく嵐の乱れ越えつつ	夜が更けて暗くなった赤石山脈の白峰三山の峰々は、神々が降りたように神々しく荒々しい。嵐が激しく乱れつつ峰々を越えてゆく。	◇参照 「甲斐が嶺をさやにも見しがけれなく横ほり伏せるさやの中山」(『古今』東歌) 「甲斐が嶺ははや雪白し神な月しぐれて越ゆるさやの中山」(蓮生『続後撰』)	

2013/1/9	山梨県 恋 笛吹川	黒髪風のしらべに秋見ゆる笛吹川の恋の水脈(みを)びき	琴や琵琶の弦をつま弾くかのように女の黒髪を吹く風の調べも、秋めいてきた。「笛を吹く」名を持つ笛吹川の水脈も、恋の水先案内をするかのように、水脈という弦をつま弾いている。	◇掛詞「秋×飽き」「(風が×笛を)吹く」「引き×弾き」 ◇縁語「しらべ、笛吹、弾き」 ◇参照「山おろし雪の白波ふきたてて子西流るる笛吹の川」(夢窓疎石) 「音にきく笛吹川は天地のおのづからなるしらべなりけり」(清水浜田『甲斐日記』)		
2013/1/8	長野県 景 風越の峰	風越(かざごし)の峰の上まで桜花そことも言はず散れる白雲	風越山の峰の上の方にまで、桜が満開である。どこと言うこともなく、麓の底の方にまで当てずっぽうに散り乱れている、白雲のような花びらの嵐よ。	◇掛詞「そこ(其処)×底」 ◇参照「風越の峰の上にて見るときは雲は麓のものにぞありける」(藤原家経『詞花』) 「風越をたこえくればほととぎす麓の雲の底に鳴くなり」(藤原清輔『千載』) 「吹き乱る風越山の桜花麓の雲に色やまがはん」(『夫木和歌抄』)		
2013/1/8	長野県 恋 千曲川	心のみ直路(ただち)一つの千曲川いざよふ袖に愁ひ繋ぎて	曲がり流れる千曲川のほとりに、心だけが一本道の人が佇む。ためらう涙の袖に愁いとどめるばかりで。	◇対句「一つ、直、路//千、曲、川」 ◇「千曲川いざよふ波の岸近き宿にのぼりつ」「たどひとり岩をめぐりてこの岸に愁を繋ぐ」(島崎藤村『千曲川旅情の歌』)		
2013/1/9	岐阜県 景 長良川	長良川闇の中なる鵜飼舟音契りし久方の影	闇の中で漁をする長良川の鵜飼舟よ。昔の「いかに契りて闇を待つらん」の歌の通り、月の桂の名を持つ京都の桂川の鵜飼舟と同じく、殺生の因縁を持って漁をする姿よ。空には確かに、月の光が煌々と照っていることだ。	◇本歌取「久方の中なる川の鵜飼舟いかに契りて闇を待つらん」(定家『新古今』)		
2013/1/9	岐阜県 恋 結ぶの神	黒髪は結ぶの神の名ばかりに乱れし袖の十六夜の月	『十六夜日記』にあった「結ぶの神(かみ)」とは名ばかりで、私の黒髪は結ばず乱れたまま、袖の涙には、十六夜の月までも映り乱れております。	◇掛詞「髪×神」 ◇参照「守れただ契り結ぶの神ならば解けぬ恨みにわれ迷はさで」(『十六夜日記』)		
2013/1/11	静岡県 景 大井川	大井川越すやはじめの人影も果て見えがたく霞む声かな	大井川を渡り始めの時にははっきりと見えていた人影、聞こえていた声々も、向こう岸に届く頃にはすっかり霞んでいる。	◇大井川の川越し「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」(馬子唄)		
2013/1/11	静岡県 恋 浜名の橋	霧かかる浜名の橋の長き夜を渡るばかりの松風の声	霧がかかっている長い浜名の橋を渡るかのように、恋人を待ちつつ長い夜を一人で過ごすばかりの私の身に、浜の松風が吹き渡ってくる。	◇序詞「～橋の→長き」 ◇縁語「かかる、橋、渡る」 ◇参照「なき渡る雲居の雁よしるべせよ浜名の橋の霧のまよひに」(久我通光『最勝四天王院障子歌』) 「風わたる浜名の橋の夕しほにさされてのぼるあま」 ◇掛詞「終はり×尾張」「会はで×阿波手」 ◇語「終はりの煙」 ◇藤娘の伝説:「藤衣」に暗示 ◇参照「嘆きのみ繁くなりゆくわが身かな君にあはでの森にやあるらん」(相模)		
2013/1/12	愛知県 景 阿波手の森	藤衣(ふぢごろも)終はりの煙立ちのぼるまた阿波手(あはで)の森のさびしや	粗末な褌を着た人々のそばで、火葬の煙が立ちのぼる。またと死者に会うことはない、阿波手の森のあまりのさびしきよ。	◇掛詞「(思)ひ×火」「熱(き)×熱(田)」 ◇「夜寒(夜寒き×夜寒の里)」 ◇「夜寒の里」の記述あり:『厚覧草』堀忘斎、『知雨亭記』横井也右		
2013/1/12	愛知県 恋 夜寒の里	思ひのみ夏の熱田の炎とて夜寒の里に木枯らしぞ吹く	恋の思いただけが、その名の通り、熱田地域の夏の炎の火のように熱いのだと言わんばかりに、寒い夜寒の里に木枯らしが吹く。	◇掛詞「(忘)井の水を」 ◇参照「別れゆく都のかたの恋しきにいざむすび見む忘井の水」(斎宮甲斐『千載』)		
2013/1/13	三重県 景 忘井	忘れ井の都忘れに散りむすぶ水の露だに昔かへらず	見れば都を忘れるというミヤコワスレが咲き、掬(すく)って飲めば同じく都を忘れるという忘井の水が花びらに散り、露を結んでいる。都の忘却に関するそんな信心深さと努力もむなしく、忘れられない昔は、二度と戻ってこない。	◇本歌取「年も終ぬ折る契りは初瀬山尾上の鐘のよその夕暮」(定家『新古今』) ◇対句「(初瀬山)、鐘/鈴鹿山、鈴、鈴虫」 ◇掛詞「鳴る×なら(で)×なる」		
2013/1/13	三重県 恋 鈴鹿山	鳴るとても祈る契りの鐘ならで鈴鹿山なる虫の息の音(ね)	鳴ると言っても、「祈る契り」と歌われた初瀬山の鐘ではなく、鈴鹿山の鈴が鳴るかのようである。同じ名を持つ鈴虫の息の音ほどの、女の失恋の悲しい吐息である。	◇参照「花咲かぬ朽木の袖の袖人のいかなるくれに思ひいつらむ」(藤原仲文『新古今』) ◇参照「鳩の海や月の光のうつろへば浪の花にも秋は見えけり」(家隆『新古今』) 「鳩の海や秋の夜わたるあまを船月にのりてや浦つたふらん」(俊成女『玉葉』)		
2013/1/12	滋賀県 景 朽木	しこぶちやいかだ流れの安曇川(あどがは)の朽木に残る袖人の声	水運安全のしこぶち神に守られていかだ流しが行われる安曇川の朽木には、かつて「朽木の袖」と呼ばれた頃のきこりたちの掛け声が残るようだ。	◇掛詞「(道を)いく×生(野)」 ◇本歌取「大江山いく野の道の 遠ければまだふみもみず天橋立」(小式部内侍『金葉』小倉百人一首)		
2013/1/12	滋賀県 恋 鳩の海	鳩の海心も四方(よも)をふたがれて溜まるばかりの袖の月影	陸に囲まれた琵琶湖のように、心も四方八方をふさがれ、湖面にも袖にも月影が宿り溜まるばかりです。	◇本歌取「みかの原わきて流るる泉川いつ見きとてか恋しかるらむ」(藤原兼輔『新古今』) ◇掛詞「いつ見×泉(川)」 「(わきて)来つ×木津川」		
2013/1/13	京都府 景 天橋立	遠かりし道をいく野の先に見る天の川原の橋立の空	遠かった生野の道のりを行き終えたその先に見る、天の川の河畔のような、幻想的な天橋立の空の美よ。	◇本歌取「時つ風吹飯の浜に出で居つづ贖(あか)ふ命は妹がためこそ」(『万葉』) 「潮みては磯越す波にあらはれて吹飯の浦に千鳥鳴くなり」(源俊賴) 「ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く」(山部赤人『万葉』) ◇掛詞「(夜半の)更け×吹(飯)」	◆「泉川」は隠れた語で、現在名の「木津川」、及び「いつ見」と「みかの原」が本歌を想起させたことで、「いつ見」が「泉川」と掛詞であることが見出される。(園井長光)	
2013/1/13	京都府 恋 瓶原	いつ見ても袖の流れはみかの原今なほわきて木津川の恋	いつ見ても、女の袖の涙の流れは、瓶原を分けて流れ、かつては泉川と呼ばれた木津川の流れのようだ。ずっと変わらず恋心を湧かせ続け、今日まで来たのである。	◇本歌取「時つ風吹飯の浜に出で居つづ贖(あか)ふ命は妹がためこそ」(『万葉』) 「潮みては磯越す波にあらはれて吹飯の浦に千鳥鳴くなり」(源俊賴) 「ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く」(山部赤人『万葉』) ◇掛詞「(夜半の)更け×吹(飯)」	◆左記の山部赤人の歌のように、チドリは真夜中の闇の中でもよく鳴く生態である。(自注)	
2013/1/15	大阪府 景 吹飯の浦	鳴く千鳥磯と袖寄る波越えて夜半(よは)の吹飯(ふけひ)の時つ浦風	磯と我が袖とに打ち寄せる波と涙とを、千鳥が鳴きながら越えて飛んでゆき、そこにちょうど浦風も吹き重なり、夜が更けてくる、深日(ふけ)港あたりの浜よ。			

2013/1/15	大阪府 恋 芥川	芥川片やたがひて飽かず待つ夢をみし まの頼みはつかに	男は飽き、片や女は、夢の中でさえ、飽きずに待つ。わずかばかりの期待のみをあてにして。三島の芥川のような涙の流れの中で。	◇掛詞「あく(たがは)×飽く」「見し間×三島」 ◇本歌取「人をとく芥川てふ津の国の名にはたがはぬものにぞありける(承香殿中納言『拾遺』)」「はつかにも君をみしませぬ(伊勢)」	
2013/1/15	兵庫県 景 芦屋	花盛る雲の林を夢に見て芦屋の里に さす小櫛(をぐし)かな	昔、公光なる者が、夢で出会った在原業平から、美しい雲に林のように覆われた花盛りの京都紫野の雲林院のことを聞き、訪れたというが、芦屋の女もまた、「塩焼の仕事で忙しくて、黄楊の櫛でおしゃれする暇もない芦屋の海女」と言われた屈辱を晴らすべく、黄楊の小櫛でおしゃれをして、芦の古家から出かけてみたいと思うのであった。	◇本歌取「声の屋の灘の塩焼いとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり(『伊勢物語』)」「人しれぬ心ひとつに嘆きつつ黄楊の小櫛ささず空もなき(藤原義孝『新勅撰』)」「参照 謡曲『雲林院』」	◆『伊勢物語』及び在原業平の由緒を求めて京都を訪れた、芦屋出身の公光の伝説に取材。公光大神と業平大神を祀る公光・業平の祠(ほこら)が芦屋に現存。(自注)
2013/1/15	兵庫県 恋 明石の浦	人は飽きわが身明石の海の峡(かひ) 通ひ淡路の袖ぞかひなき	あの人は私に飽きたのに、私ばかりがあの人に飽きていません。もう通い合うこともないと流す涙は、明石と淡路島との間に横たわる明石海峡の海のようにです。	◇掛詞「(わが身)飽かじ×明石」「(通ひ)合はじ×淡路(あはち)」 ◇序詞「〜峡〜かひ(甲斐)なき」	
2013/1/14	奈良県 景 飛鳥川	飛鳥川昨日の淵にもみち見てまた今日 の瀬に花の香を聞く	人生は、昨日は淵に溜まった秋の紅葉の葉が見えると思ったら、今日は瀬ににじんだ春の花の香りが漂ってくる、四季移ろう飛鳥川のようなものだ。	◇対句「昨日、淵、もみぢ、見て、(秋) // 今日、瀬、花の香、聞く、(春)」 ◇本歌取「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる(『古今』)」	
2013/1/14	奈良県 恋 天の香具山	夏過ぎて袂は天の香具山の干しあひも なく濡る秋雨	夏が過ぎ、恋人と会うことなくなった女の涙の袂は、かつて天の香具山に干された着物のようには乾かず、秋雨にも降られて濡れているのであった。	◇縁語「天、星あひ」 ◇掛詞「逢ひ×合ひ」 ◇本歌取「春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり天の香具山(持統天皇『万葉』小倉百人一首)」	
2013/1/14	和歌山県 景 名草山	湧き出づる三井水(みみづ)清き名草山 吉事(よごと)思ゆる柳陰かな	清き三井水(さんせいすい)の湧き出る名草山よ。柳の下でくつろいでいると、ふと縁起のよかつたことばかりが思い出される。	◇紀三井寺の三井水:吉祥水・清淨水・楊柳水	
2013/1/14	和歌山県 恋 和歌の浦	片男波和歌の葦辺(あしべ)の鶴(たづ) の声に袖も満ち来る沖つ潮騒	鶴たちは、和歌の浦に満ち始めた勇敢な男のような波のために狭くなってきた干潟を避け、岸の葦辺までやって来た。男への答えに迷う女の袖の涙も、沖の潮騒のように満ちている。鶴たちの鳴き声と女の泣き声とが、重なり渡る。	◇本歌取「若の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る(山部赤人『万葉』)」 ◇掛詞「片男波×潟を無み」	
2013/1/16	鳥取県 景 大山	幾夜見れど飽かぬ巖(いはほ)の剣かも 火神岳(ほのかみだけ)の猛(たけ)き弓引き	今は弓ヶ浜半島と呼ばれ、かつて国引きに使った「夜見(よみ)の嶋」の名の通り、幾夜見上げても飽きない、大山(だいせん)剣ヶ峰の雄々しさよ。火神岳と呼ばれたこの山こそ、国引きならぬ弓引きをする弓道の達人か、剣の達人のようである。	◇「夜見嶋」:弓ヶ浜半島の旧名 ◇「火神岳」:大山の旧名 ◇『出雲国風土記』の国引き神話	◆八束水臣津野命が、杭である火神岳(大山)に縄である夜見の嶋(弓ヶ浜半島)を引っかけて火神岳から三穂の埼(松江市美保関町)を引き寄せたとある。(自注)
2013/1/16	鳥取県 恋 三朝	三夜幾夜(みよいくよ)渡らぬ朝の三朝橋 (みささばし)川の果てまでもとる宿の灯(ひ)	三日三晩待っても、未だにあなたは三朝橋を渡って来てくれない。会えずに渡ることになる三途の川にさえ見える三朝川の果てまで、温泉宿の灯がともっています。	◇掛詞「三夜×三世」「三朝(三度も朝×三朝温泉)」 ◇縁語「三世、(三途の)川」 ◇対句「三夜 // 三朝」	◆大久保左馬之祐が、自ら助けた白狼の主である妙見大菩薩から湧き湯の場所を教えられた伝説にちなむ。(自注)
2013/1/17	鳥根県 景 隠岐	新しき昔と今のやまとうた隠岐の夜空 の星々の影	かつて後鳥羽院によって最期の最期まで『新古今和歌集』の編まれ続けた隠岐の夜空の星々は、一首一首の和歌のようである。	◇『隠岐本 新古今和歌集』	
2013/1/17	鳥根県 恋 石見	音にのみ聞けど石見の言はず見ず 告げて逢ひたる有明の夢	噂に聞くばかりで、まだ恋心を言っても、あなたに会ってもいないのに、もう告げ終わってお互いに会っている気がする、石見の有明の月の情景です。	◇掛詞「石見×言は(ず)見(ず)」 ◇対句「言はず、告げて // 見ず、逢ひたる」	
2013/1/16	岡山県 景 高梁川	舟浮かぶ松山川の夕暮に小雪を分けて 寒き風吹く	舟が浮かぶ高梁川の美しい夕暮よ。小雪の間を冷たい風が吹き抜けることだ。	◇松山川:高梁川の旧名の一。 ◇参照「川床に白き小石のうすひかる高梁川はなつかしきかな(赤木柝平)」	
2013/1/16	岡山県 恋 虫明迫門	来ぬ人の胸の朝日は昇りそむ心の 邑久(おく)の虫明(むしあけ)の空	来てくれない恋人の思いの浅さを思わせる朝日が昇り始めた。私の心の奥に沁みしてくる、邑久の虫明の瀬戸の空の情景。	◇掛詞「(胸の)浅×朝(日)」「(心の)奥×邑久」 ◇参照「虫明の迫門の曙見る折ぞ都のことも忘れにけり(平忠盛)」 ◇『狭衣物語』	
2013/1/17	広島県 景 鞆の浦	むろの木の下道歩む旅人の影を忘れぬ 鞆の浦風	ネズの木々の下の道を歩みゆく旅人、そして、同字を持ち、同地を旅した大伴旅人の面影を忘れまいと決意したかのように、鞆の浦に優しくもたくましい風が吹く。	◇参照「吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人ぞなき」 ◇鞆の浦の磯のむろの木見むごとに相見し妹は忘れぬやも(大伴旅人『万葉』)	
2013/1/17	広島県 恋 厳島	愛(いづく)しむ夢のよそには厳島安芸 のうつつにつらき斎女(いつきめ)	私が見る夢の中でだけ、愛しんでくれる人は、現実には私に飽きて、愛しんでくれない。私は、かつて厳しく深慮して神に身を捧げた、安芸の厳島神社の巫女のようにです。	◇掛詞「厳島×愛しま(ず)」「安芸×飽き」	
2013/1/18	山口県 景 室積	室積(むろづみ)の夕日の光暮れ果てず 砂子(すなご)松葉に映ゆる紅(くれなゐ)	海岸線に暮れきれないぎりぎりの夕日の紅色の光が白砂青松に映えている、室積の光景よ。	◇対句「夕日の光、紅 // 砂子、(白) // 松葉、(青)」 ◇(「白砂青松」) ◇掛詞「夕日の光×(山口県)光(市)」	
2013/1/18	山口県 恋 麻里布の浦	見れど飽かぬ夢も真禰(まかぢ)の浮枕 麻里布(まりふ)の浦に人ぞ恋しき	見飽きないものは、恋しい人に唯一出会える夢だけとなったが、それも、麻里布の浦に一人漕ぎ出て寝る船旅のように、はかないものです。	◇本歌取「真禰貫き船し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦に宿りせませし(『万葉』)」	
2013/1/19	徳島県 景 木津神の浦	木津神(こづかみ)の浦と袖とに寄る 波の昔にかへる渦潮の影	鳴門の渦潮の姿を見ていると、渦潮の波のように寄せては返る袖の涙を伴って、昔の木津神の浦が思い出される。	◇掛詞「(波が)返る×(心が昔に)帰る」 ◇参照「こづかみの浦に年経て寄る波も同じ所にかへるなりけり(藤原基房『後拾遺』)」	◆現在、「木津神(こづかみ)」の字(あざ)はなく、「木津神橋」や「木津神地区」など俗称に残るのみである。以下は、同地域を指すと思われる記録。「紀津」:『南海流浪記』(道範、13c)「木津上の浦」:『阿波名所図絵』(1811)「津屋 木津・木津等恐是」:『阿波志』(1815)「こづかみ」:『粟の落穂』(野口年長、1840~)、『国歌大観』(1903)「木津神浦」:『板野郡誌』(1972)「木津上の津」:『角川日本地名大辞典』(1986)

2013/1/19	徳島県 恋 眉山	眉根(まよね)揺く山と月との空かけて 傍(こ)ぎても阿波を迷ふ舟かな	空にそびえる眉山や、美女の眉と古来より言われる三日月に似た、昔の我が恋人に会えるよう、眉を揺く古来からのまじないをしても、男は阿波の海を撈ぎ迷う舟のように、会え	◇本歌取「眉(まよ)のごと雲層に見ゆる阿波の山 かけて撈ぐ舟泊(とまり)知らずも(船王『万葉』) ◇縁語「弦打、弓張り」 ◇参照「弦打の山より出づる月影は弓張りところ 言ふべかりけれ」(宗祇) ◇菅原道真の高月池伝説		
2013/1/18	香川県 景 弦打山	弦打(つるうち)の山も物の怪(け)は らふらん弓張りならぬ望月(もちづき) の影	弦打の山も、その名の通り、鳴弦の名士と同じく弦打ちをおこなって物の怪を祓っている ために、弓張り月ではなく、くつきりと穢れなき円い満月が空に出ているのか。	◇掛詞「さ貫き(そのよ)こ」×讀岐」 ◇縁語「石、貫き乱れ、白玉」 ◇参照「名くはし狹峯の鳥の～待ちか恋ふらむ愛 しき妻らは」(人麻呂『万葉』) 『愛恋無限』中河与一		
2013/1/18	香川県 恋 沙弥島	荒床(あらどこ)の狭峯(さみね)の石 に寄する波さ貫(ぬ)き乱れし袖の白 玉	死者たちが横たわっている讀岐の沙弥島の荒々しい石の床に、波が打ち寄せる。緒が切 れて散り乱れた白玉のようなその波と同じく、私の袖にも人の帰りを待つ涙が落ちてい る。	◇参照「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかな ひぬ今は漕ぎ出でな(額田王『万葉』) ◇掛詞「大羽振り×大祝(鶴姫の出自は大祝氏)」 ◇鶴姫伝説:「わが恋は三島の浦のうつせ貝むなし くなりて名をぞわづらふ」(大祝鶴姫)		
2013/1/19	愛媛県 景 熟田津	月霞み舟の灯火(ともしび)漕ぎ隠れ 潮満ち雲る熟田津(にきたづ)の空	月が霞み、漕ぎゆく舟の灯火も霞に隠れ、満ちてくる潮に空まで曇る、春の熟田津の空。	◇参照「野分立ち、にはかに肌寒き夕暮れのほ ど」(『源氏物語 桐壺』) ◇掛詞・音「(八)入×潮(江)」やしほのうしほえ」 ◇「我が影を映すこ鏡の如し」(山内豊房)		
2013/1/19	愛媛県 恋 大三島	鈴揺らぐ三島の鶴の大羽振り(おほ はふり)うつせ貝寄る浜そむなしき	入水した鶴姫の抱いていた鈴に似た鈴が揺れて鳴り、鶴も大きく羽ばたいている、大三島 よ。鶴姫が自らの恋を諭えた中身の無い貝が、むなしくも浜に打ち寄せている。	◇枕詞「苺萱の一乱れ」 ◇参照「苺萱の関守にのみ見えつるは人もゆるさ ぬ道べなりけり」(菅原道真『新古今』) 「数ならぬ身をもいかんこと人間はばいかなる名をか 苺萱の関」(宗祇) ◇説教節『かるかや』 ◇謡曲『苺萱』 ◇浄瑠璃『苺萱委門筑紫縁』(並木宗輔・並木丈輔)	◆「鈴揺らぐ」は、入水時に母の形見 の鈴を抱いていたことから。(自注)	
2013/1/20	高知県 景 室戸	野分立つ室戸岬の気配してやがて 荒磯(ありそ)に五百重(いほへ)風吹く	室戸岬付近が台風めいてきたかと思うと、そのまま海岸は暴風が吹きささぶ荒れ模様と なった。	◇謡曲『藍染川』 ◇「染川を渡らむ人のいかでかは色になるてふこと のなからむ」(『伊勢物語』) 「筑紫なる思ひ染川渡りなば水やまさらむよどむ時 なく」(藤原真忠『後撰』) 「渡りてはあだになるてふ染川の心づくしになりもこ そすれ」(『後撰』)		
2013/1/20	高知県 恋 鏡川	わが袖の色も八入(やしほ)の潮江 (うしほえ)を映す鏡のみみち葉の影	旧名の「潮江川」を改めた「鏡川」の名の通り、幾重もの秋の紅葉の葉に染まった川面は、 失恋の私の袖の紅葉を映す鏡です。	◇枕詞「苺萱の一乱れ」 ◇参照「苺萱の関守にのみ見えつるは人もゆるさ ぬ道べなりけり」(菅原道真『新古今』) 「数ならぬ身をもいかんこと人間はばいかなる名をか 苺萱の関」(宗祇) ◇説教節『かるかや』 ◇謡曲『苺萱』 ◇浄瑠璃『苺萱委門筑紫縁』(並木宗輔・並木丈輔)		
2013/1/20	福岡県 景 苺萱の 関	苺萱(かるかや)の乱れし髪(かみ)の面影に 鶴のみ羽(は)ぶく白雪の関	苺萱の伝説の妻柱子と妻千里の黒髪はもう面影ばかりで、現実には石重丸の姉千代鶴 姫を思わせる鶴だけが羽ばたいている、白雪降る苺萱の関よ。	◇謡曲『藍染川』 ◇「染川を渡らむ人のいかでかは色になるてふこと のなからむ」(『伊勢物語』) 「筑紫なる思ひ染川渡りなば水やまさらむよどむ時 なく」(藤原真忠『後撰』) 「渡りてはあだになるてふ染川の心づくしになりもこ そすれ」(『後撰』)		
2013/1/20	福岡県 恋 藍染川	夕暮の藍染川に千世契る梢と袖に残 る梅が香	夕暮の藍染川に身を投げて永遠の契りを結んだ梅壺を思わせて、ほとりの梅の木の梢 と、そのそばを通り過ぎた人々の袖にのみ、梅の花の香りが残るのであった。	◇枕詞「葦ちはふ→(神):神功皇后」 ◇神功皇后の魚占い:『記紀』『肥前国風土記』 ◇「遠つ人松浦佐用姫夫恋ひに領巾振りしより負へ る山の名」(山上憶良『万葉』) ◇「源氏物語 玉鬘」:「鏡神社」の記述あり ◇俗謡『唐津湯』:「唐津ゆきたい佐代姫さんがひれ を振り振り松浦湯」 ◇「唐津小唄」『松浦湯』(詩:北原白秋)	◆「千世契る」は、伝説中の神官と梅 壺の子梅千世から。(自注)	
2013/1/21	佐賀県 景 玉島	葦(たま)ちはふ玉島川の鮎(あゆ)光り唐津 の海に清き水脈(み)をかな	神功皇后が鮎を釣ったという神々しい玉島川の水脈は、今も鮎の色に光りつつ、唐津湾 に清くそそいでいる。	◇「花ぼうろ」:雲仙地方の霧水 ◇「木の下」:身の寄せ所 ◇掛詞「(胸)集がらし×木枯らし」 ◇参照「音にきく鼓が滝をうちみればただ山川のな るにぞ有ける」(権理『拾遺和歌集』『権理姫集』)		
2013/1/21	佐賀県 恋 領巾振 の嶺	帰る日を松浦(まつら)の姫の小夜時 雨(さよしぐれ)石の鏡に昔思(おぼ) えて	昔、夫が帰る日を待って泣き伏し、待ち疲れて石になった松浦佐用姫の涙のような、小夜 時雨が降る。「鏡山」の名の通り、濡れた鏡のような石に、昔が映し出されるようだ。	◇掛詞「(心)を秘め×姫(島)」		
2013/1/21	長崎県 景 竹敷	梅が香も松の緑もしかめやもにほふ もみちの竹敷(たけしき)の浦	松竹梅のめでたさと言えど、梅の香りや松の緑でさえ匹敵することは難しい。紅葉に彩ら れた竹敷の海岸のすばらしさには。	◇掛詞「(心)を秘め×姫(島)」		
2013/1/21	長崎県 恋 雲仙	霧水(こぼ)の涙の袖も花ぼうろ胸こ がらしの木(こ)の下(もと)の風	霧が水った花ぼうろに包まれた木々の枝と同じく、失恋の袖にも涙の花ぼうろができてい ます。木々の下で、胸を焦がしつつ身を寄せる相手は、木枯らしの風だけです。	◇掛詞「(心)を秘め×姫(島)」		
2013/1/22	熊本県 景 鼓が滝	深山路(みやまち)をのぼる河内の 木々の声に鼓が滝の音(おと)そ混じ	金峰山麓の深い路をのぼりつつ聞こえる、河内川付近の木々のざわめきに、やがて鼓が 滝の音が混じり聞こえてくる。	◇掛詞「(心)を秘め×姫(島)」		
2013/1/22	熊本県 恋 風流島	白妙の着ても濡衣脱ぐもまた裸たは れの島の岩肌	裸島とも言われる風流島の岩肌が、昼夜白波をかぶって濡れているように、白絹の着物 も、濡れていけば、着ても脱いでも地肌が見えてしまったのだ戯(ざ)れた着物です。濡れ 衣を着せたような恋にうっかり嵌るわけにはいきません。	◇掛詞「(心)を秘め×姫(島)」		
2013/1/22	大分県 景 倉無の 浜	倉無(くらなし)の闇なき浜の名に赤き 裳をしのはする夕映えの海	倉無の浜とも言われた闇無浜の名の通り、「暗」い「闇」ではない赤い裳を穿いた人々のい にしへの田植えを偲ばせる、夕映えの赤い海よ。	◇掛詞「(心)を秘め×姫(島)」		
2013/1/22	大分県 恋 姫島	恋ふる身は仏頼みの女狐(めぎつね) よ踊る心を姫島の袖	恋をしているわが身は、仏を騙して頼りにする雌狐のようなものです。踊る心を秘めつつ も、狐の姿に扮した姫島の盆踊りを眺めていて、そう思うのです。	◇参照「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の 袖の香ぞする」(『古今』)		
2013/1/23	宮崎県 景 高千穂	高千穂や瓊瓊杵尊(ににぎのみこと) 降(お)りしり月日ぞ水脈(み)をの 映を流るる	瓊瓊杵尊が高千穂に降臨して以来、五箇瀬川峡谷の水脈のように、月日も流れたこと だ。	◇本歌取「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の 袖の香ぞする」(『古今』)		
2013/1/23	宮崎県 恋 阿波岐 原	五月(さつき)待つ阿波岐原(あはき がはら)に降りしける黄泉(よみ)なら なくに橘の雨	イザナギノミコトが黄泉の国から帰還して禊をしたことで次々と神々が生まれたとされる阿 波岐原の地に咲く橘の花に、雨が降りしける。ここは黄泉の国自体ではないのに、故人を 思わせる橘の花に。	◇本歌取「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の 袖の香ぞする」(『古今』)		
2013/1/23	鹿児島県 景 霧島	覆ひ立つ霧島山の峰々(け)煙(け)ぶる 夜空の紅(くれなゐ)の影	夜空を覆うようにそびえ立つ霧島連峰よ。今にも噴火せんと煙り、紅色になりつつある姿 よ。			

2013/1/23	鹿児島県 恋 薩摩の瀬戸	逢ふ瀬なく開くる戸もなき見ぬ人を遠き薩摩の雲居とぞ思ふ	逢瀬も訪問もなくて見ることができないあなたの姿を、かつての薩摩の雲居の歌のように遠いものだと思っています。	◇本歌取 「隼人の薩摩の瀬戸を雲居なす遠くも我れは今日見つるかも」(長田王『万葉』)		
2013/1/24	沖縄県 景 首里	霞より首里の城(ぐすく)ぞあらはるる すごき御嶽(うたき)に照る朝日かな	霞の中から首里城が現れる。凄みのある、この巨大な御嶽に、朝日が照ることだ。	◇「御嶽」		
2013/1/24	沖縄県 恋 那覇	漁り船沖の夕日の恋燃えて縄たきが てに暮るる那覇の江	漁船のいる沖の向こうに沈みゆく夕日のように、恋は燃えつつ、縄を手繰り寄せかねている漁師のように、相手に振り向いてもらえないまま暮れてゆく、沖縄の那覇の入江よ。	◇参照 「思ひきやひなの別れにおとろへて海人の縄たき漁りせんとは」(『古今』) 「那覇の江にはらめき過ぎし夕立はさびしき舟をまねく濡らしぬ」(釈道空『遠やまひこ』)		